

1 歴史と文化財のまち 鎌倉

いきなりで恐縮だが、今年の『広報かまくら』1月号の1面は、「まちの文化財を、後世へ伝えるために」という特集であった。鎌倉市にとって、文化財や歴史がいかに重要な位置を占めるかを端的に示していると言えよう。また、鎌倉市民憲章（制定昭和48年11月3日）の前文には、「鎌倉は、海と山の美しい自然環境とゆたかな歴史的遺産をもつ古都であり、わたくしたち市民のふるさとです。」との一節がある。鎌倉が「古都」であることは、自明のここのように見える。

しかしながら、実は鎌倉は不思議な「古都」である。鎌倉は、東京から電車で一時間ほどで到着することができるということもあって、人口十七万人の小都市でありながら、年間二千万人の観光客が訪れる日本でも有数の観光地である。なかでも代表的な観光スポット・小町通りは、食べ歩きをする人々やみやげものを買う人々で賑わうが、果たしてそこに「古都」らしい光景が見られるであろうか。小町通りには和食や人力車など「日本の伝統文化」風の商売が満ち溢れているが、それは日本各地の観光地で見られる一般的な「和テイスト」に過ぎず、鎌倉独自の歴史が反映されたものではない。そもそも、現在の小町通りの商店街が形を見せるのは、近代の昭和になってからなのである。

そのほか、鎌倉のあちらこちらで見かけるおしゃれな洋館やレトロな商店は、鎌倉のまち歩きの魅力の一つであるが、これらも明治以降のもの、多くは昭和になってからの建物である。つまり、現在の鎌倉が、江戸時代以前の鎌倉の姿をどれほど伝えているのかは、はなはだ心もとないのである。

2 イメージと事実の相違

一昨年のNHK大河ドラマは鎌倉をおもな舞台としており、源頼朝や北条義時が活躍するストーリーであった。このことからわかるように、鎌倉は「頼朝と鎌倉幕府のまち」というイメージが圧倒的に強い。

たとえば、鎌倉市の市章（マーク）はササリンドウと呼ばれる図柄で（下参照）、市役所の公用車やマンホールの蓋など広く見かけるが、このデザインが実は頼朝と関係している。



出典：Wikipedia

鎌倉市のホームページ内の「もっと知りたい！市章「ササリンドウ」」というページによれば、ササリンドウが源頼朝の家紋と言われていることから市章に制定されたという。しかし、同ページでも述べられているように、実際に頼朝が竜胆紋を使っていたという証拠は一切残ってい

ないため、「頼朝の使っていた紋どころだったかどうかは不明」である。むしろ、源氏と笹竜胆が結びついたのは江戸時代のことであったと考えられる。

また、源氏山公園には源頼朝の銅像があり、「源氏」という名に因むものと想像されるが、実は「源氏山」という名前は江戸時代になって初めて登場するのである。この山は、南北朝時代には「武庫山」もしくは「亀谷山」と呼ばれていたことが史料からわかっている。

さらに江戸時代には、新たな歴史物語が付け加えられていく。鎌倉は江ノ島とセットで、江戸からの一大観光地になっていく。鎌倉はさまざまな歴史的な事件の現場であり、歴史上の人物が活躍した舞台であったことから、ゆかりのある場所・建物は名所旧跡となり、新たな伝説や伝承がさらに創出されていったのである。

たとえば、有名な鶴岡八幡宮の大銀杏（少し前に大風で倒れ、現在は二代目が成長中）に関わる伝説がそれに当たる。鶴岡八幡宮は源実朝が公暁に暗殺された現場であったが、江戸時代になると公暁が境内の銀杏の木に隠れていたという説が登場し、その歴史物語を具体化する大銀杏の木が、新たに名所となっていく。詳細は不明ながらも、鎌倉時代の名馬「するすみ・いけづき」の厩というものもあったらしい。これらの名所は、必ずしも鎌倉時代の事実に基づくものではないのである。

3 「武家の古都・鎌倉」が世界遺産として認められないのはなぜか

現代のわれわれが抱く「頼朝と鎌倉幕府のまち」というイメージが、確実な証拠に恵まれていないものであるということは、鎌倉の世界遺産の落選とも密接に関わっている。同じような「古都」である奈良・京都と比較すると、鎌倉には政権が置かれていた時代の痕跡がきわめて薄い。奈良には平城京の中心であり天皇の居所である平城宮跡が広大な歴史公園としてそのまま残されており、京都には平安京の中心で天皇の居所の由緒を受け継ぐ京都御所が現役で存在し、平安京を受け継ぐ基盤の目状の道路網も残されている。

いっぽう、政治都市鎌倉の中心で、「古都」の源とも言うべき将軍の御所（幕府）の跡は、明確な範囲も確定しておらず、史跡や公園などのオープンスペースとして保存されているわけではない。現地を訪れても、わずかに道の傍に石碑が建てられているばかりである。現在の鎌倉に、鎌倉時代から伝わっているものと言え、若宮大路と鎌倉大仏、和賀江島^{じま}くらいのものである。これらは、残念ながら政権（幕府）の本拠と直接に関わるものではない。つまり、奈良・京都と異なって、鎌倉にはかつての政権の拠点を偲ぶ史跡がないのである。

せめて鎌倉時代の武家屋敷の建物でも残っていれば、だいぶ状況は異なっていたと思われるが、ご承知のように、残念ながらそういった建築は残されていない。発掘調査の成果によれば、今小路西遺跡の御成小学校地点には、大規模な二つの武家屋敷があったと考えられている。しかし、想像で復元したイラストは存在するものの、現地に行ったとしても何も目にすることはできないのである。

世界遺産登録をめざしていた「武家の古都・鎌倉」が二〇一三年にあえなく落選してしまったのも、結局は、現在残る史跡だけでは「武家の古都」を十分に知ることができないからである。

つまり、われわれが認識している古都・鎌倉は、鎌倉時代そのままの「古都」ではなく、古都の魅力に惹かれた人々が、時代ごとに付け加えてきた由緒や魅力、いいかえれば「幻想」の集大

成と言えらるだろう。鎌倉のいたるところに、古代以来の歴史上の人物・出来事の情報在地名や伝承などの形で埋め込まれており、現代にいたるまで古都鎌倉を愛してきた人々の営々と続く活動の痕跡が積み重なっている。そうしたさまざま記憶の断片が混ざり合って、「幻想の都 鎌倉」を心に浮かび上がらせてくれるのである。したがって、地名や伝承、地形、地中に埋まっている遺構や発掘された遺物、そのほか多くの文化財など、断片的な手がかりを大事に守り伝えていくことこそが、たとえ「幻想」であろうとも、「古都鎌倉」を守り伝えることにつながるのである。

4 文化財と観光資源

近年は、文化財の観光資源としての活用が注目されるようになって来ている。確かに重要な視点ではあるが、観光の目玉となる文化財、言い換えれば目立つ文化財や見た目に華やかな文化財のみが大事にされる危険性も含まれている。鎌倉のような古都においては、たとえ地味であろうとも、「幻想の都」を浮かび上がらせる手がかりとなる、すべての文化財を保存・管理することが必要である。

以下は、文化庁の「文化財を中核とした観光拠点形成による経済活性化調査研究 平成 28 年度 研究成果報告」からの抜粋であるが、きわめて重要な指摘がなされている（特に波線部分）。

「歴史的な素晴らしい資源が、本来の姿で、それも町中に数多く残っているという地域は、人々を魅了するはずである。このことから、観光資源として捉えるための前提としても、文化財の適切な修理や日常的な維持管理などは欠くことができない。文化財の価値を損なうことなく後世に継承することとともに、より多くの人に文化財を鑑賞・体験してもらうことなどを通じて、文化財は地域や社会の核となり、広く地域の活性化や人と人とのネットワークを構築していく。」

日常的な文化財の保存・管理は、観光資源としての文化財の活用からも、不可欠なことなのである。

加えて、文化財の価値を地元の方々と共有するために、研究と発信こそがますます重要となると考える。その観点から、文化財関係の長期的な視点からの施設整備と人的な充実を、強く望むものである。今後も、ぜひ皆様と共に、このすばらしい「古都鎌倉」を守り伝えていきたいと思うところである。

*参考文献

高橋慎一郎『幻想の都 鎌倉—都市としての歴史をたどる』（光文社新書、2022 年刊）